

西暦	和暦	年齢		
1415	応永 22	1	(東山大谷でご誕生)	
1431	永享 3	17	(青蓮院で得度)	
1457	長祿 1	43	(8 代目継職)	
1461	寛正 2	47	(御文章を初めて著す)	
1465	寛正 6	51	(大谷破却)	
1470	文明 2	56	6 月 南荘紺屋道場(慈光寺)の圓浄に寿像を授ける 10 月 北荘 <sup>かたぎ</sup> 檜木屋道場(真宗寺)の道頭に親鸞聖人伝絵を授ける 道頭、堂舎を再興し、蓮如上人に落慶法要の導師となることを 願い出る	
1471	文明 3	57	(吉崎)	
1475	文明 7	61	(吉崎退去。枚方出口へ)	
1476	文明 8	62	堺道頭に開基道祐の影像を免許 真宗寺道頭が一字を献じ信証院と称される。	72
1477	文明 9	63	堺「御文拝読の法座」	276
1478	文明 10	64	山科へ堺別院の建物を移す	
1479	文明 11	65	堺の古坊を山科へ移し寝殿に	
1489	延徳 1	75	(実如上人に譲る)	
1490	延徳 2	76	堺の和歌を詠む	和歌
1494	明応 3	80	金泥九字名号を信証院の本尊とする	
1496	明応 5	82	正月富田から上洛 2 月富田へ 3 月堺から上洛 4 月 堺へ下向 大坂御坊建立地選定 (『反故裏書』)	20 22
1498	明応 7	84	堺に帰る(空善聞書・一期記)	313
1499	明応 8	85	(山科で示寂)	

## (72)堺の豪商のこと

北荘 檜木屋(堅木屋)源右衛門(道頭)

参考文献

『堺市史』第 2 巻/286p

第十九章 堺と佛教 第三節 一向宗 (一) 蓮如と堺

(国立国会図書館 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1049484/1/184>)

『堺別院史』

『大和路 蓮如上人を歩く』奈良教区蓮如上人 500 遠忌法要実行委員会

大和の了妙 橿原市金臺寺 (吉野飯貝本善寺の縁起に了妙の記述)

(72)日向屋は仏にならないでしょう

実悟『蓮如上人一語記』5（『聖典全書』5巻 699頁）に同意文

一、蓮如上人仰せられ候ふ。堺の日向屋は三拾万貫を持ちたれども、死にたるが仏には成り候ふまじ。大和の了妙は帷一つをも着かね候へども、このたび仏に成るべきよと、仰せられ候ふよしに候ふ。

「日向屋の死にたる」はいつかわかりませんでした。大和の了妙寂は1498(明応7)年

## (276)『御文』を読み聞かせ 兼誉 (6男)

(276)面白きこと

実悟『蓮如上人一語記』213（『聖典全書』5巻 740頁）に同意文

実悟『蓮如上人仰條々連々聞書』76（『聖典全書』5巻 797頁）に同意文

一、蓮如上人、堺の御坊に御座のとき、兼誉御まゐり候ふ。御堂において卓のうへに『御文』をおかせられて、一人二人〔乃至〕五人十人まゐられ候ふ人々に対し、『御文』をよませられ候ふ。その夜、蓮如上人御物語りのとき仰せられ候ふ。このあひだ面白きことを思ひいだして候ふ。つねに『御文』を一人なりとも来らん人にもよませてきかせば、有縁の人は信をとるべし。このあひだ面白きことを思案しいだしたると、くれぐれ仰せられ候ふ。さて『御文』肝要の御ことと、いよいよしられ候ふとのことと仰せられ候ふなり。

実悟『蓮如上人御一期記』（『聖典全書』5巻 866頁）

(七九)

一 荆膽國の人、我朝にきたりて御勸化をうけし事あり。其昔彼國の人愛子を一人もちたりしを、うしなひなげきて、觀世音菩薩に後生菩提をいのり申侍しに、あらたに示現かうぶりてぞ侍りける。その告にいはいはく、日本日域にわたり、此比、念佛一門繁昌の宗體あり。かの勸化をうけて、後生の一大事の義をさだむべしと、示現をたしかにかうぶりて、この日域にわたり、和泉國堺の津に著岸し、縁をたづねて、本願寺の上人に後生の一義をうけ奉るべしとて、境の御坊へ參て蓮如上人にぞまいりける。すなはち御教化をたびたびうけ申、ありがたき旨になりて、本國荆膽國へぞかへりける。不思議なりしことゝぞ申し侍りし。本國の言説も、たがはずや侍りけん。領解せしめけるぞ奇妙なりき。

「荆膽國（けいたんこく：異国）」

実悟『蓮如上人仰條々連々聞書』（『聖典全書』5巻 830頁）

(一九九)

一 旦國の人四、五人日本にわたり、蓮【(如)】一上人へまいる事あり。堺の坊に御座の折節、彼國の人一子を失、なげきて子の向後をも知て佛果になし給れと、觀音にいのり奉るに、示現あらたにかうぶり、又日本に渡、後生の向後を知べしと告給ひければ、日本に渡、堺の津にて觀音の示現のごとくたづねゆきて、縁をもとめ蓮【(如)】一上人に御勸化をうけて、ありがたき旨申けり。本國の出立にて御坊へまいりけるが、事の外に大に一間に一人は有かぬ程なりける。その子孫いまも侍る覽とぞおぼゆる。

## 塩湯

『蓮如上人和歌集成』（『聖典全書』5巻1077頁）

六二 和泉國堺にての御歌 延徳二 十二月

(115)七十に あまるよはひの さかひにて 年やこえなん はじめ成けり

(116)七十に 七のとしの はじめかな 春めづらしき さかひなるらん

(117)八専も 寒も土用も 波風に みな吹<sup>ふき</sup>うする 堺なりけり

八専（はっせん） 陰陽道などで吉凶が極端に現れやすく、特に雨が多く降ったり、物事が滞ったりしやすいとされる注意が必要な期間。

寒（かん）・土用（どよう） それぞれ冬の最も厳しい寒さの時期、および季節の変わり目の不安定な時期。これらはいずれも、体調を崩しやすく、禁忌（やっちはいけないこと）が多い「忌むべき時期」とされてきました。

(118)七十七 よはひはながき 老の身の 春やむかへん さかひなるかな

(119)えにしあれば 又やくだりて 境なる 入しほぶろに 年をこそとれ

(120)わきいづる 和泉のさかひ しほぶろに くだりていりし えにしふかさよ

（『聖典全書』5巻1090頁）（以下、年紀不明分）

一〇〇 （堺を再訪して詠みける歌）

(198)このたびは 不思議に命 ながらへて 又きてみつる 堺なるらむ

(234)眞實の 信心ならでは 後の世の いま入しほの さかいなりけり

現在唯一営業している塩湯「湊潮湯」南海本線湊駅徒歩5分

## (20)(22)上り下り辛勞なれども

(20) 82歳

実悟『蓮如上人御一期記』191（『聖典全書』5巻892頁）に同意文

一、明応五年正月二十三日に富田殿より御上洛ありて、仰せに、当年よりいよいよ信心なきひとには御あひあるまじきと、かたく仰せ候ふなり。安心のとほりいよいよ仰せきかせられて、また誓願寺に能をさせられけり。二月十七日にやがて富田殿へ御下向ありて、三月二十七日に堺殿より御上洛ありて、二十八日に仰せられ候ふ。「自信教人信」（礼讃）のこころを仰せきかせられんがために、上り下り辛勞なれども御出であるところは、信をとりよろこぶよし申すほどに、うれしくてまたのぼりたりと仰せられ候ひき。

(22)4月

一、同じき十二日に堺殿へ御下向あり。

顕誓（蓮如上人の孫）『反故裏書』（『聖典全書』5巻1237頁）

抑攝州東成郡生玉庄内大坂の貴坊草創の事は、去明應第五の秋下旬、蓮如上人堺津へ御出の時御覧じそめられ一宇御建立、そのはじめより種々の寄瑞不思議等は有となん。

(313) 7 男蓮悟（兼縁）…… 10 男実悟を育てた兄

実悟『蓮如上人一語記』165 - 166（『聖典全書』5 卷 730 頁）

実悟『蓮如上人仰條々連々聞書』50-51（『聖典全書』5 卷 791 頁）

一 堺にて蓮【(如)】一上人へ蓮悟、「御文」を被申候時被仰云、年も寄候に、  
むつかしき事を云よと被仰候て、後に被仰候は、佛法だに信ぜば、いか程なりと  
もあそばしてたまはるべきよしを被仰侍りし也と [云々]。

一 同堺の御坊に蓮【(如)】一上人、夜更て蠟燭をともされ、名號を遊ばされき。  
其時被仰けるは、老體にて手もふるひ、目もかすみ候へども、明日越中へ下と候  
程に、加様に被遊候。一日も堪忍失墮にて候べき間、御辛勞をかへりみられず、  
人に苦勞をもさせ候はで、信をとらせたく思食候由被仰候き。

(313) 仏様からの恵み

実悟『蓮如上人一語記』247（『聖典全書』5 卷 746 頁）に同意文

実悟『蓮如上人仰條々連々聞書』43（『聖典全書』5 卷 789 頁）に同意文

一、兼縁、堺にて、蓮如上人御存生のとき、背摺布を買得ありければ、蓮如上人仰せられ候ふ。かやうの物はわが方にもあるものを、無用の買ひごとよと仰せられ候ふ。兼縁、自物にてとりまうしたると答へまうし候ふところに、仰せられ候ふ。それはわが物かと仰せられ候ふ。ことごとく仏物、如来・聖人（親鸞）の御用にもることはあるまじく候ふ。